

色とりどりの紙こいのぼり

坂折地区で毎年4月下旬から5月上旬にかけて行っているかつおとこいのぼりの川渡し。伊与木川堤防に飾る紙こいのぼりは、1年かけて地区で作っています。例年8月に、大方高校美術部が夏合宿で紙こいのぼりの色塗りに取り組んでいます。今年も、地区の子どもたちも色塗りに挑戦しました。子どもたちは、小さいサイズの紙こいのぼりを選択。不織布にあらかじめ描かれた黒い枠線の中を、思い思いに色を塗っていきます。約1時間で塗り終え、自分の名前を書いた世界に一つだけのオリジナル紙こいのぼりが完成しました。



好きな色で紙こいのぼりに色を塗る坂折地区の子どもたち。「大人と比べて、子どもはひらめきで塗るので早い」と大谷清水区長。

「鯉」の書 佐賀支所に展示



墨で豪快に「鯉」と書かれた大きな書(たて80cm×よこ140cm)。佐賀支所の1階ロビーに8月から飾られているこの書は、中村プロザデザイン事務所(四万十市)社長・上岡貞夫さんが書き、黒潮町へ寄贈いただいたものです。上岡さんはデザインだけでなく、絵画や書も師範の腕前。黒潮町では、土佐佐賀駅周辺の屋外看板などを作っていました。



感謝状を受け取る上岡貞夫さん(左)と大西町長。

「鯉」という字が好きで、事務所に飾っていたものを、訪問した大西町長が気に入りに、譲ってもらったものです。カツオの町黒潮町にぴったりの素晴らしい書をありがとうございます。

馬荷地区の宝を特産品に 弘法大師ゆかりの「七立栗」



子宝栗とも呼ばれる七立栗。

黒潮町馬荷には、弘法大師ゆかりの「七立栗」という栗がありま。七立栗は、一枝に小さな毬栗(いぐり)がいくつも連なっているのが特徴。花が咲く期間が長く、枝の下の方から実を結び、年に7回以上収穫できることから、七立栗と名付けられました。その姿はとても愛らしく、主に観賞用の枝栗として出荷されています。

昔は地区のあちこちに自生していた七立栗ですが、時代とともに山焼きが行われなくなると、七立栗は野生化し、シバグリ(野生の栗)との見分けが難しくなりました。貴重な七立栗を守ろうと、平成3年から地元の堀川寛さんが七立栗の再生に向けて取り組みを開始。平成6年、堀川さんから地元有志で「七立栗保存会」を設立。平成20

年からは、試行的に堀川さんの栽培した枝栗の出荷を始め、徐々に販路を広げていきました。そして平成22年11月、保存会は「七立栗生産組合」となり、平成24年3月には中馬荷に作業場が完成。作業場には予冷庫が設置され、出荷作業が効率的になりました。

現在、組合員10人が七立栗を栽培し、うち7人が出荷しています。「今後、地区に七立栗の生産者が増え、蛸瀬川流域に広がり、黒潮町の特産品となつて、地域活性化につながれば。」と代表の矢野史明さん。組合では、栗の販売に向けた調査研究や種の保存などにも取り組んでいます。

長年の努力が実を結び、馬荷地区には、七立栗の風景が復活しつつあります。地区の宝とします。今後ますます広がっていくことを期待しています。



週3回の出荷に合わせ、前日に収穫し作業場で選果します。